

『#フルメタル・ジャケット』(1987年)をNHK BSで視聴した。スタンリー・キューブリック監督作品。「フルメタル・ジャケット」とは弾体の鉛を銅などで覆った弾丸のこと。原作はグスタフ・ハスフォードの『ショート・タイマーズ』

物語は2つに分かれる。前半では海兵隊訓練所で新兵が受ける過酷な訓練、後半ではベトナムでの行動が描かれる。

キャンプの鬼教官 H の指導のもとで訓練が行われる。徹底的な叱責と罵倒、殴る蹴るの体罰が加えられ続ける。心身ともに痛めつけられるものだった。さらに連帯責任による懲罰、訓練生の間で行われるいじめ。日本軍ではこのようなことが日常茶飯事であるとは認識していたが、どこの世界も同じなのだ。落ちこぼれだった L は、H から早々に目を付けられ、激しいいじめを受け続ける。過酷な訓練により精神に変調をきたしてしまい、卒業式の夜にライフル銃を無断で持ち出してトイレにいたところを同僚に発見され、駆け付けた H を射殺した後、自ら命を絶ってしまう。

彼らは厳しい訓練を耐え抜き一人前の海兵隊員となり、ベトナムへ送られる。報道部員になっていた J は上官から目をつけられ、前線での取材を命じられる。訓練所での同期が属する小隊に同行することとなる。そこでの戦闘状況が延々と描かれる。狙撃兵の待ち伏せを受け、多大な犠牲者を出す。J らは狙撃兵への復讐を決意し、狙撃兵がいるとみられるビルに忍び込む。J が見た狙撃兵の正体は、まだ若い少女であった。J は狙撃兵から返り討ちにされそうになるが、駆け付けた同僚が彼女に銃弾を浴びせた。虫の息となった狙撃兵の少女は祈りながらとどめを刺すよう懇願し、J は拳銃の引き金を引いた。運よく五体満足で任期を終えられる期待に喜びを感じながら、J らは高らかに歌いつつ(ミッキーマウスの歌)、闇夜の戦場を行軍してゆく場面で映画は終わる。

映画全体を通じて、戦争の非人間性と無意味さがテーマとして貫かれている。具体的には、過酷な訓練や戦争の残酷さが兵士たちの人間性を変容させる様子、兵士たちが戦争マシーンとして「役割」を果たす存在となるプロセスが描かれている。そして人間性を失った戦争の現実を突きつける。主人公の J が軍隊新聞の記者として描かれることで、戦争報道とその伝え方がいかに現実と乖離しているかが批評的に示されている。

日本軍をテーマにした映画には、『野火』（2015 年）：太平洋戦争末期のフィリピンを舞台に、人間の極限状態を描いた作品、『硫黄島からの手紙』（2006 年）：硫黄島の戦いを日本軍の視点から描いたクリント・イーストウッド監督の映画等がある。